2025年度　園評価書

園番号　42　園名　駒越こども園

Ⅰ 経営の重点に関わること

評価段階（A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない）

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
心も体も元気な子	「自分らしさが自信につながる」	子ども達は、ヒト、モノ、コトとかかわりながら、好きな遊びを楽しんでいる	身近な生き物や植物、季節の遊び、製作など、子どもの興味関心や季節に合わせた環境構成をすることで、子どもたちが遊びの場を自ら選び、好きな遊びを見つけるようになってきている。また、保育者や友達に親しみをもち、楽しむ姿が見られる。今後も、子どもがヒト、モノ、コトと関わる姿を肯定的に受け止め、体験を広げられるようにしていきたい。	A	A	・子ども達がみんな、のびのび活動している。進んで遊び道具を用意しようとする様子もあり、保育の成果が出ていると思う ・先生たちが子どもの遊びや姿の深いところを探ると、課題はまだまだあると思うが、着実に育ってきているのではないか	・子どもが、自分のやってみたいことを実現するために、自ら考え行動に移していけるように見守り、応答的な声掛けをしていく ・子どもが自分で伝えようとする姿を見守り、自分で伝え受け止められた経験を重ねていけるようにする
		子ども達はさまざまなことに興味をもち、考えたり挑戦したりしている	「面白そう」「やってみたい」と思うことに対して、自ら遊び出し「次はこうしたい」という思いをもち、そのためにどうしたら良いのかを考えたり挑戦したりしようとする姿が少しずつ見られるようになってきている。しかしまだ、保育者に聞くことも多い。自身で考え挑戦できるような環境やかかわりをしていきたい。	A	A		
		子ども達は、自分の思いを保育者や友達に伝え、自ら生活を進めようとしている	子どもの良さを認めたり、思いに共感することで、自分の思いを伝える姿が見られるが、中には考えや意見を伝えることが難しい子も見られる。保育者が思いを引き出したり受け止めたりする関わりを続けることで、自分の思いを伝えたり相手の話を聞きながら自ら生活を進めていけるようにしていきたい。	B	B		

Ⅱ 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策（来年度の具体的な取組目標等）
1 こども園における教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	職員は子ども達の言動を肯定的に受け止め、一人一人の発達段階に合わせて係っている	子どもの言葉や行動を肯定的に受け止め、関わるようにしたことで、子どもが、認めてもらう嬉しさを感じたり、自己肯定感を持つようになってきている。しかし、各学年や個々の発達の姿の見取りが難しかったり、育ちを支えたい思いから導くかかわりになってしまうことも時に見られる。子どもの良いところを見つけ、どのような育ちにつながっていくのかを職員が意識しながらかかわっていきたい	B	B	・丁寧な報告で、言うことはない ・子どもが自分から進んで遊んだり、表現をしたりするその中で社会性を身に着けていけるような配慮をしていると思う。今後も続けていってほしい。 ・行事や日々の遊びなど、先生たちがめあてをはっきりともって取り組んでいる様子がわかる。めあてが大切なことはもちろんだが、先生が面白がることも大切だと思う。面白がって、教材研究をしたり計画を立てていくといいですね ・こども園は、どのような配慮が必要な子がいるのか。家庭的に支援が必要な子もいるのか。 様々な状況の子どもがいると思うが、子どもが卑屈な気持ちにならないように支援ができるといいですね ・園のクリスマスプレゼントでコマをもらった。自分はコマで遊んだことがなかったが、子どもが園で回し方を教わって練習し「園で回せた」と言うので家でも一緒にやってみた。子どもだけでなく、親も一緒に経験を広げることができた ・コドモンの配信を毎日楽しみにしている。写真が楽しみで、それを見ながらその日の出来事を子どもと話している。子どもとの会話のきっかけになっている。また、園庭の掲示板もよく見るようになった。食育活動の掲示や全体の活動の様子など自分のクラスだけでなく、他の学年の様子もわかる ・小学校との連携は大切ですね。引き続きかかわりを深めていってください	・職員が発達の道筋を意識しながら個々の姿に目を向け、子ども自身の育ちを支えられるような関りをしていく ・また、保育教諭主導にならないよう、見守りと声掛けのタイミングを模索し関わっていく
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	職員は家庭との連携を丁寧にし、生活リズムや体調、情緒の状態や家庭環境を把握し、一人ひとりに合った対応をしている	前日の様子や家からの連絡、視診、家庭環境など様々な事から一人一人の健康状態を把握し、必要に応じ活動を変えるなど、無理なく生活できる配慮をしている。早遅番にも配慮しながら保護者とのコミュニケーションを取り、職員全体で情報を共有する意識を持っている。	A	A		・個々の生活リズムに合わせて職員間で連携を取り合い関わっていく ・登降園時、保護者との連絡を丁寧にしていく
	(3)環境を通して行う教育及び保育	職員は、室内・園庭・忠霊塔公園、それぞれの場の特徴を活かした活用の工夫をしている	乳児、幼児共に園庭では、可動遊具や泥んこ、色水、自然物を使っての遊びなどで楽しめるようにし、忠霊塔公園ではのびのびと体を動かして遊んだり、自然と触れ合い探索できるような遊びの工夫をしている。また、乳児組園舎裏のスペースの活用や遊戯室にフリースペースを設けるなどした。今後は、一人一人の子どもが、自分の思いに合わせて遊びの場を選べるように園全体で取り組んでいきたい。	B	B		・子どもが自分の思いに合わせた遊びの場の選択ができるように、環境作りや職員間の連携の工夫をしていく
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	職員は子ども達が自身で危険回避ができるよう、様々な災害に応じた避難の方法を再考し避難訓練を実施している	従来の訓練内容を見直し、南海トラフ地震を想定した訓練を実施した。室内の机や棚を揺らし音を出したり倒すなどして、想定される被害を伝えたり、「ユレタ」を使い実際の揺れを体験したりしたことで、保育者も子どもも減災への意識が高まってきている。今後も更に具体的な被害を想定した訓練を行い、自分自身で身を守るための行動が定着するよう、継続的に行っていきたい。	A	A		・今年度に引き続き、具体的な被害想定に基づいた訓練の計画、実施をしていく。 ・様々な被害想定をし、職員の臨機応変な対応の意識を高めていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	職員は子ども達が自分自身で基本的生活習慣が身につくようかかわりや環境の工夫をしている	毎日の生活の繰り返しを大切にしながら、子どもの発達に合わせた声掛けや援助をするように心がけている。また、子どもの動線に合わせた場所の工夫をしたり、絵図や時計を使って視覚的に分かりやすく伝えるなどしている。今後も基本的生活習慣が身につくように、個々の姿を丁寧に見取り、個々に合わせたかかわりをしていきたい	A	A		・子どもが、日々の繰り返しの中で、生活に必要な手順に気付き、見通しをもって生活できるように見守り、 個々の発達に合わせた声掛けや援助をしていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	職員は、定期的な会議等で支援児の情報を共有し、共通理解をもちながら関わっている	毎月の会議で個の表れについて共有したり、3ヶ月ごとに支援方法について協議をしたりしアドバイスシートを用いて職員間でより良い方法を模索するようにした。また、子どもとのかかわりやうみのこセンターとの研修を通して、支援方法の学びを深めていきたい。しかしまだ、個々の子どものあらわれの対する職員全体の共通理解が難しい。どの職員も同じ対応ができるよう、支援児のあらわれとともに、保育者の支援方法も周知していきたい。	B	B		・会議などを通して、全職員が支援児の現れや支援方法について共通理解をし園全体で共通の対応をしていく。 ・支援児との関りや研修を通して、職員の学びを深めていく
5組織運営	(1)組織体制の充実	職員一人一人が自分の役割に責任を持ち、情報共有と連携を図り、組織として協力し合いながら運営を進めている	分掌が企画案を職員に働きかけ、連携・協力しながら行事を進め、各分掌の中でのそれぞれが自身の役割を意識し活動に参加している。また、進捗状況の確認をしながら職員全体での情報をしている。	A	A		・職員一人一人が分掌に責任をもち、進捗状況の確認などをしながら、園全体で取り組めるようにしていく ・反省や課題を出して、次回につなげていく
6研　修	(1)研修体制の充実	研修部を中心に計画的に公開保育や園内研修を行い、研修テーマに沿った学びを職員間で深めている	園内研修では、保育者がどういう支援や環境作りをしているか、研修テーマに沿って共通理解をし、子どもの姿を語り合い次の保育に活かしている。意見が出やすいように資料を事前に配布したり、研修に参加できなかった時には研修の記録を見たり、職員間で伝え合い全体で園内研修に取り組む体制を作っている。	A	A		・公開保育、園内研修に園の職員全体が取り組めるよう計画、実施をしていく。 ・子どもの遊びの姿を語り合いながら、研修を進めていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	職員は、子ども達が必要な物を自由に手に取れる環境を工夫している	子どもの遊びの様子を見ながら興味を探ったり、遊びの発展の姿を予測して物の準備をしたことで、子どもが自ら物を選んで制作をしたり、遊ぶ姿が見られるようになってきた。しかし、子どもがより手に取りやすくするために整理整頓をし、素材を感じて選べる環境を作っていきたい。	B	B		・子どもが自分で選んで遊びを進めていけるような環境の設定と遊びの広がりを予測した環境の再構成をしていく ・遊びの続きが楽しみになるような片付け方の工夫や環境整備
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	職員は、保育実践を発信しながら子ども達の心と体の育ちを家庭と共有するよう努めている	保育支援システム「コドモン」で、保護者に日々の子どもたちの様子を写真や文章で分かりやすく伝えられるように努めている。また、毎月のクラスだよりでは、子どもの遊びの経過や育ちの姿から、発達の見取りを伝えるようにした。送迎時には個別に声をかけたり、必要に応じて保護者と面談を行うことで保護者支援に繋げている。	A	A		・日々の保育の様子や行事の取り組み等を、コドモンや掲示板、お便りなどで保護者に伝え、育ちの姿の共有をしていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	園は、駒越小学校との連携を密にし、職員研修を行ったり、公開保育と公開授業で子ども達の育ちの共有をしている	駒越小学校の公開授業への参観や自園の公開保育、合同研修、お便りなどの情報交換を行った。今後も就学への接続を意識した研修、参観を継続的に行い、子どもの育ちの共有を更に深めていきたい。また、小学校との連携について、保護者に向けての情報発信をしていきたい。	A	A		・小学校との合同研修会、公開保育、授業参観の機会をもち、子どもの育ちの共有や就学に向けた情報交換等を行っていく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	園は地域資源を活用し、子ども達に駒越地区のことを伝えるとともに、地域の方にもこども園について知ってもらえるよう発信したり、交流の機会をもったりしている	地域の農家の方に来ていただき、駒豆の栽培、収穫を行ったことで、子ども達は駒越地区の特産品に触れることができた。また、忠霊塔へ出かけたり、近隣への散歩などを通して地域を知るきっかけとなっている。近隣施設への地域だより配布、交流館祭りでの作品展示等でこども園の様子を発信したり、勤労感謝訪問等を通して交流の機会をもつようにした。	A	A		・今までの地域との交流の積み重ねを大切にし、地域とつながる活動の継続をしていく